

# 『俊頼髓脳』の漢文学

小野 泰 央

はじめに

現存最古の歌論書『歌経標式』の「歌経」という語が『詩経』という書名を想起させ、また「式」という語が『文筆式』『詩式』などの詩論書に由来することが象徴するように、歌論は詩論を土台として生まれた。<sup>(1)</sup>以後の「式」、『和歌作式』『和歌式』『石見女式』『和歌体十種』なども漢文体で書かれている。

その歌論書を、『髓脳髓脳』で「歌の姿、病を避るべきこと、あまたの髓脳に見えたれども」とする「髓脳」の呼称も『詩髓脳』などの詩論書に由来する。<sup>(2)</sup>『俊頼髓脳』の出現は、『歌経標式』に規定される「歌病」「歌体」などの「式」から歌語の「積」に移行する分岐点となるが、その「積」には、同時代の詩論『江談抄』第四・五・六と共通する逸話が存在する。

『俊頼髓脳』は漢文学に取り巻かれていた。

一、書序

古来、書の冒頭には書序が置かれる。日本において現存最古の書序は『古事記』の序である。『歌経標式』も書序の形式に倣って「臣浜成言。原夫歌者」で始まり、識語で終わる。後の歌論書も、本文が「式」で分類され、<sup>(4)</sup>『古今集』『新撰和歌』『後拾遺集』などの歌集も、序の後に続くのは歌であるから、序の部分は明瞭である。<sup>(5)</sup>

一方で、本文が和文の散文である『俊頼髓脳』は、一見して序の区別が付きにくい。ただ書序の文体によると、序ははっきりと分けられ、それに則って各句を区切ると、<sup>(6)</sup>その形態は次のようになる。<sup>(7)</sup>

漫句 大和御言の歌は、我が秋津州の国の戯ぶれ遊びなれば、

神代より始まりて、今日今に絶ゆること無し。

漫句 大和の国に生まれなむ人は、

男にても女にても、貴きも卑しきも、  
好み習ふべけれども、

情ある人は進み、情無き者は進まざることか。

傍句

例えば、

水に住む魚の鱗を失ひ、空を翔ける鳥の翼の生ひ  
ざらむ

送句

が如し。

発句

凡そ、

漫句

歌の起こり、古今の序、和歌の式に見えたり。

漫句

世も上り、人の心も巧みなりし時、春夏秋冬につ  
けて、

花を翫び、郭公を待ち、紅葉を惜しみ、雪をおも  
しろしと思ひ、君を祝ひ、我が身を憂へ、別れを  
惜しみ、旅を哀れび、妹背の仲を恋ひ、事に臨み  
て思ひを述ぶる

送句

につけても、

送句

詠み残したる節も無く、続け漏らせる詞も見えず。  
如何にしてかは、末の世の人の珍しき様にも取り  
なすべき。

良く知れるも無く、良く知らざるも無し。

良く詠めるも無く、良く詠まざるも無し。

詠まれぬをも、詠み顔に思ひ、知らざるをも、知  
り顔に言ふ

送句 なるべし。

傍句 抑も歌に、

あまたの姿を分かち、八つの病を記し、九の品を  
表して、

送句

いときなき者を教へ、愚かなる心を悟らしむる

者あり。

傍字

然かはあれど、

習ひ伝へざれば、悟ること難く、

浮かべて学ばざれば、覚ゆること少し。

埋もれ木の埋もれて、人に知られざる臥所を尋ね、  
滝の流れに流れて、過ぎぬる言葉の葉を集めて

みれば、

送句

浜の真砂よりも多く、雨の脚よりも繁し。

霞を隔てて春の山に向ひ、霧に咽びて秋の野辺に  
臨める

臨める

が如きなり。

送句

山賤の卑しき言葉なれど、尋ねざれば朝の露と消  
え失せぬ。

え失せぬ。

玉の台の妙なる御言なれど、聞き知らざれば風の  
前の塵と成りぬるにや。

前の塵と成りぬるにや。

哀れなるかなや。

漫句 此の道の目の前に失せぬることを。

傍句 俊頼のみ一人、

此の事を営みて、徒らに年月を送れども、  
我が君も遊め給はず、世の人もまた哀れぶことも  
無し。

明け暮れは身の憂へを嘆き、起き臥しは人の辛さ  
を恨む。

隠れては、男山にまします八の幡の御うつくし  
みを待ち、

現れては、三笠の杜に栄へ給へる藤の裏葉に頼を  
かく。

傍句 恵み給へ、哀れび給へ。

隠れたる信有れば、現れたる感有る

送句 ものをや。

「漫句」は対偶を成さない文で、『作文大体』には「漫  
句」「不対合」とあり、「発句」「傍字」「傍句」は段落の  
初めの接続語で、『作文大体』に「発句」「施頭」。又有施中。  
頗如傍句」とあり、「送句」は対句に付す語で、『作文  
大体』に「施尾」とある。

「凡そ」は、『貞観格』序に「凡格者」、『新撰和歌』序  
に「凡そ歌は」、『後拾遺集』序に「凡そ、日のうちによ  
るづのことわざ多かる中に」などとある。

「抑も」は、『作文大体』に「抑、且、就中等也。如発  
句」とあり、『古今集』仮名序に「「そもそも、歌の様、  
六つなり」、『新撰和歌』の序文に「「抑夫上代之篇」とあ

る。

「然かはあれども」も、『作文大体』「筆大体」「傍字」  
に「「然而」とあり、『古今集』仮名序に「「しかあれど、  
これかれ」、『古今集』真名序に「「然而、神代七代」、『後  
拾遺集』序に「「しかあれど、のち見むために」とある。

「哀れなるかなや」は、『作文大体』「雑筆大体」「発  
句」に「「呼嗟」とある。ここでは「「述懐」を示す最終段  
落の冒頭として機能する。例えば、大江匡衡「「中秋三五  
夕於江州野亭对月言志」（『本朝文粹』卷八）に「「嗟呼、  
心事日日衰」、『古今集』真名序に「「嗟乎、人丸既没。和  
歌不在斯哉」、「大井川行幸和歌序」では序全体の冒頭に

「「あはれ、わが君の御代」、『暮春白河尚齒会和歌』の序  
に「「あはれ、すべらぎの」とある。

「俊頼のみ一人」は、最終段落で自らの名を記すなど  
して「「述懐」を示す。『古今集』真名序に「「臣等、詞少  
春花之艶」、『暮春白河尚齒会和歌』序に「「清輔、昔は秋  
の深山辺の草のうちに」、『讚岐典侍日記』上巻に「「思ひ  
いづれば、わが君につかまつること」とある。序の最終  
段落は、主催者や当代を賛美することが一般的であった  
が、平安中期から自らの不遇も記すようになった。皆が  
亡くなって自分だけがものごとを知っているというのは、  
『新撰和歌』序の「「伝勅納言亦已薨逝。空貯妙辞於箱中、  
独屑落涙于襟上。若貫之逝去、歌亦散逸」などと同じ発

想。歌道を知る人の少ないことを嘆く例として、『古今集』仮名序に「ここに、いにしへの事をも歌の心をも知れる人、僅かに一人二人なりき」、大江匡房『暮年詩記』に「識文之人、無一人存焉」とある。

「徒に年月を送れども」という詩文に専念して空しく時間を費やしたというのは、序における述懐部分の常套表現で、「好忠百首」序に「あらたまの年の三十にあまるまで(中略)明けては暮るるひさかたの、月日をのみも過ぐすかな」、藤原季仲に「如僕者、携竹書而多年」(『本朝統文粹』巻九・「賦松影浮池水、応教詩。一首」)などがある。

「明け暮れは身の憂へを嘆き、起き臥しは人の辛さを恨む」などの現状を嘆くことも、序における述懐部分の常套表現で、橘正通に「齡亜顔駟、過三代而猶沈、恨同伯鸞、歌五噫而將去」(『本朝文粹』巻一〇・「初冬同賦紅葉高窓雨」)などがある。「明け暮れ」「起き臥し」などのように、思いの不断なることを、朝晩を意味する語で表すのも、上奏文などに見られる表現で、大江朝綱に「起伏慙怖、必待哀矜」(『本朝文粹』巻四・「為同公辭攝政准三宮等表」)などがある。

対句部分も漢文に見られる対で構成される。例えば、「山賤の卑しき言葉なれど、尋ねざれば朝の露と消え失せぬ。玉の台の妙なる御言なれど、聞き知らざれば風の

前の塵と成りぬるにや」など四句で成す対を「隔句対」と呼ぶ。「八つの病を記し、九の品を表して」は「数対」「良く知れるも無く、良く知らざるも無し。良く詠めるも無く、良く詠まざるも無し。詠まれぬをも、詠み顔に思ひ、知らざるをも、知り顔に言ふなるべし」という同語を連鎖した対は「聯綿対」と呼ばれる。「聯綿対」に「留春春不住、春婦人寂寞。厭風風不定、風起花蕭索」(『和漢朗詠集』「三月尽」白居易)、「悲之又悲、莫悲於老後子。恨而更恨、莫恨於少先親」(『本朝文粹』巻十四・大江朝綱「為亡息澄明四十九願文」)などがある。

散文の物語や日記などにも書序らしき部分は確認されるが、このような漢文書序の形式は取らない。漢文を起源とする歌論書や歌集・詩集においてこそその形式が継承されたことになる。それは院政期の散文『俊頼髓腦』にまで継承され、『奥義抄』などにも引き継がれていく。

## 二、漢詩文表現

序には、漢詩文表現が使われる。

「水に住む魚の鱗を失ひ、空を翔ける鳥の翼の生ひざらむが如し」は出典未詳であるが、大切な物が欠けていることを示し、鱗の無い魚と飛べない鳥を対にした表現として、「堯日高照、刷傷翅於恩光之中、舜海広沢、濯枯鱗於徳水之末」(『本朝文粹』巻六・文室如正「請殊蒙

天恩因准先例兼任式部大輔闕状、「如枯鱗之臥轍、投心於恩波、似窮鳥之入懷、懸思於惠露」(同・三善道統「請被特蒙恩恤因准先例拳達弁官右衛門権佐闕状」)などがある。共に官職を求めめる奏上である。

「此の道の目の前に失せぬる」の「此の道」という語は漢語「斯道」を和訓化したもので、ここでは「和歌の道」を意味する。「此の道が滅びる」という表現は、『礼記』「壇弓下」の「斯道也、將亡矣」や「論語」「子罕第九」「子畏於匡、曰、文王既没、文不在茲乎。天之將喪斯文也」を原典とする。歌道にも敷衍されたことは、『統日本後紀』に「夫和歌之体、比興為先、感動人情、最在茲矣。季世陵遲、斯道已墜」(嘉祥二年(八四九))、『古今集』真名序に「人丸既没、和歌不在斯哉」、『古今集序注』所引「能因家集序」に「如彼天曆以往三代集之明主、降勅恢茲道、四人之歌仙、奉詔獻家集」などの例からうかがえる。ただし歌道が廢れているとするのは、『古今集』真名序に「欲興久廢之道」とあるように、自らの編纂を正当化する時の表現。

「かくれたる信あれば現れたる感ある」は、『淮南子』人間訓の「有陰德者、必有陽報。有隱行者、必有昭名」を出典とする。『世俗諺文』の目次に「有陰德者、必有陽報。隱信者、有顯感」とある。

「事に臨みて思ひを述ぶる」は、部立の「雜」に相当

するであろうが、漢詩題に見られる「即事」にあたる。

「新宅晚涼即事」(『田氏歌集』卷中)などの例がある。

序文以外にも、漢詩文表現であると考えられる件が確認される。

「野守の鏡」の話において、天智天皇が野守に言った言葉に、「地に向かひて、頭を地に付けて」とある言い回しは、『周礼注疏』卷二十五「大祝」の鄭注に「稽首、拝頭至地也。頓首、拝頭叩地也」などである。

その野守の言葉として「頭の雪を悟り、面の皺をかぞふる」とするのは奏上文に見られる表現で、同様の対に「昔呂尙父之面波、別渭水而猶疊。園司徒之鬢雪、出商山而既寒」(『本朝文粹』卷二・巨勢為時「答六条左大臣辭職表勅」)などがある。臣下の会話に奏上の文体が使われたわけである。

「山桜飽くまで色を」という歌に対して、「めでたき世には風だに吹かず」とするのは、『論衡』「是応」に「儒者論太平瑞応：風不鳴条、雨不破塊、五日一風、十日一雨」などに見られ、それは政事的な発想に基づく。

「山高み」という歌に対して、「心なき物に心をつけ、物言はぬ物に物を言はするは、歌の常の習ひなれば」とする「心なき」と「物言わぬ」の対には、「落花不語空辞樹、流水無情自入池」(『和漢朗詠集』春・落花・一二六、『白氏文集』卷五十七「過元家履信宅」)、「誰謂

水無心、濃艶臨兮波変色。誰謂花不語、輕漾激兮影動唇」(『和漢朗詠集』春・花・一一七・菅原文時)などがある。「心なき物をつけ」は、『古今集』仮名序にも「世の中に<sup>ある</sup>人、事、業、繁きものなれば、心に思ふ事を、見るもの、聞くものに付けて、言ひ出せるなり」とある。『古今集』仮名序の「たとへ歌」では「これは、万の草木、鳥、獸に付けて、心を見する也」とし、『古今集序注』所引の「公任卿注」でも、「たとへ歌」について、『毛詩正義』を引用して「四曰興。注云、託事於物、諸<sup>挙</sup>草木鳥獸、以見意者、法興詞也」とする。ただし『俊賴髓腦』では単に、物に仮託して自身の状態を述べるのではなく、所謂、擬人として用いる。

### 三、詩論

その「心なき物に心をつけ」という発想は詩にも見られるから、それは詩論でもある。別に『俊賴髓腦』には詩論が確認される。比喻表現を、

また、歌には似物といふことあり。

として「似物」とすることは、『作文大体』「詩雜例」に「似物体」という項目が立てられ、『江談抄』第四でも「此句古人号大似物」とされる。遡るならば、『文鏡秘府論』「地」「論大勢等」に「形似体」とある。

題詠の詠法について、

題の文字は、三文字、四文字、五文字あるを、必ず詠むべき文字、必ずしも詠まざる文字、まはして心を詠むべき文字、さへてあらはに詠むべき文字あるを、よく心得べきなり。

と定義する題字の置き方も詩論に拠る。『作文大体』「発句不必載居題字事」に「句題詩発句、悉載居題字。是常例也。又不載例有也」とあって、特に虚字を詠み込まない例が多いとすることは、題字を載せることが前提であったからである。さらに『作文大体』では「題目」「破題」「比喻」「本文」などの句ごとの題の載せ方を示す。『江談抄』第四においても、「秋未出詩境」という句題による領聯「文峰案轡白駒影、詞海艤舟紅葉声」について「白駒者秋也」とするなど、題字の置き方を記した話が散見する。唐代詩論においても、例えば、『詩格』「論破題」に「二曰直致、就題中通變其事、以為首句是也。崔補闕詠<sup>⑩</sup>庭雪、万里一点白、長空鳥不飛。此用一白字、傷其雪体、故云直致」とある。五代・神叟の『詩格』「論破題」には「一曰、就題、用題目便為首句是也」として「張祜、春遊東林寺詩、一到東林寺、春深景致芳」の例を挙げる。

詠作の内容において「心」の重要性を示して、

心を先として、めづらしき節をもとめ、詞を飾り詠むべきなり。

として、「…を先とする」も、漢文訓読で用いられる表現で、『文鏡秘府論』『南』『論文意』に「但古人後於語、先於意」(『詩議』)とあり、『詩人玉屑』巻六「意命」には「先意義、後文詞」(『劉貢甫詩話』)とある。後に『詠歌大概』に「情以新為先」とするの同表現。

歌における「本文」論は、すでに、『新撰髓腦』に記されているが、『俊頼髓腦』で、さらに、

歌を詠むに、古き歌に詠み似せればわるきを、今の歌詠みましつれば、あしからずとぞ承る。

として、古歌よりも優れたものになっていけばよいとする考えは、例歌から経信の『難後拾遺抄』に拠っているが、そこには「詩などにはかかることいとおほかり。またまたたづねらるべし」(『後拾遺第一』・春上)として、詩論に多いという。それは、『江談抄』第四に「都府樓纔看瓦色。観音寺只聴鐘声。菅家。此詩於鎮府不出門胸句也。其時儒者評云。此詩文集。香炉峯雪撥簾看之句ヨリハ猶勝被作云々。」とあり、『大鏡』にも「詩にまさざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士ども申しけれ。」とある白詩句に道真句が勝るといふ話を指す。さらに、それは、例えば、『詩人玉屑』に、「出」「上」「二」字勝矣「此一聯勝」「亦勝庾矣」「述者不及作者」「作者不及述者」(『詩人玉屑』巻八「沿襲」「誠齋論沿襲」)「勝退之詩」(『詩人玉屑』巻十一「礙理」「桜桃詩」)などあって、

宋代詩話にも見られる発想である。

#### 四、故事

漢故事を「本文」とする歌の「釈」は『俊頼髓腦』では主に二箇所に掲載される。すなわち、『万葉集』や三代集などの古歌に対する「釈」としての趙高の故事・蘇武の故事・張騫の故事・卞和の故事と、連歌の後に、『後拾遺集』などの近代歌に対する「釈」としての王昭君の故事・楊貴妃の故事・紅葉題詩・孔子の字謎である。俊頼は歌の「本文」として漢故事を意識していたわけである。

#### ア、本文引用

##### i、『世説新語』『西京雜記』

俊頼は、漢故事の本文間における違いをも理解していた。王昭君の逸話について、

胡の国の帝の「我が国にはよき女のなきに容貌よからむ人賜らむ」と申しける」とも申したる文ありとぞ。

とあって、「とも申したる文ありとぞ」とするのは、その部分が『漢書』『後漢書』にはなく、『西京雜記』(第二)に「匈奴入朝、求美人为閼氏」と、『世説新語』(賢媛)に「後匈奴来和、求美女於漢帝」とあるからで、つまりその「文」とは、『西京雜記』『世説新語』の文を指

していることになる。<sup>(13)</sup>

賄賂を贈らなかつたために絵師が醜い肖像を描いたという内容も『漢書』『後漢書』にはなく、『世説新語』に、漢元帝宮人既多、乃令画工図之。欲有呼者、輒披図召之。其中常者、皆行貨賂。王明君姿容甚麗、志不苟求、工遂毀為其狀。

とあり、『西京雜記』に、

元帝後宮既多、不得常見、乃使画工図形、案図召幸之、諸宮人皆賂画工、多者十萬、少者亦不減五萬、独王嬙不肯、遂不得見、匈奴入朝、求美人为闕氏、於是上案図、以昭君行、及去召見、貌為後宮第一、善応対、举止閑雅、帝悔之、而名籍已定、帝重信於外国、故不復更人、乃窮案其事。

とあることでも理解することができ。つまり、『俊頼髓脳』では本文を『世説新語』『西京雜記』に拠り、別に『漢書』『後漢書』の存在をも想定していることになる。

## ii、白氏文集

本文の引用は楊貴妃の逸話にさらに顕著である。『俊頼髓脳』と「長恨歌伝」「長恨歌」(『白氏文集』卷十二)本文の対応は次のごとくである。

三千人の寵愛、一人になんおはしけるを、  
後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身(「長恨歌」)

世にあらむ人は、男子をばまうけずして、女子をな  
んまうくべきとぞいひける。

遂令天下父母心、不重生男重生女(「長恨歌」)

願はくは、その楊貴妃を給はりて、天下の怒りを和  
めむと申しければ。

当時敢言者、請以貴妃塞天下怒。(「長恨歌伝」)

もし天に在らば翼を並べる鳥と作らん。地にあらば  
願はくは枝を交はしたる木と為らん。天も長く地も  
久しく終はることあらば、この恨みは綿々として絶  
ゆる期なからむ。

在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。天長地久有時尽、  
此恨綿綿無絕期。(「長恨歌」)

『白氏文集』十二「長恨歌」「長恨歌伝」を書き下した  
かのような表記も含まれ、『俊頼髓脳』は原典本文を見  
て筆録していたとも推測される。

「かぞいろは」という歌に対する「積」では、

「燕、男二人せず」といへる事、文集の文なりとぞ  
として、「文集」という典拠を示す。ただし「燕、男二  
人せず」という本文は『白氏文集』には見られない。<sup>(14)</sup>た  
だそれに続く、次の「燕くる」という歌に対する「積」  
に、

燕も、戊己の日は、すべてまうで来ぬとぞ、詩など  
にも作りて



として詩に作られているとするのは、『白氏文集』巻七十一「禽虫十二章。并序」に「燕遼戊己鵲避歲、茲事因何羽族知」とあるのを指していると考えられる。自注にも「不知其然也。燕銜泥、常避戊己日」とある。当該詩が『白氏文集』全七十一巻中最末尾の作品であることは、閲覧にも益したはずである。<sup>16)</sup>

### iii、宋代筆記小説

『江談抄』『注好選』『三教指帰注』などの院政期における説話は、典拠が不明である場合が少なくない。『俊頼髓脳』も同様である。そこには宋代筆記小説と関係があることにその要因があると推測される。

#### ①孔子の字謎

「垣ごしに馬を牛とはいはねども」という歌に対する「釈」には、孔子が垣根から頭を出した馬を「牛だ」と言ったのを、顔回は一里、第二第三の弟子たちはそれぞれ三里毎に理解したという「牛」と「午」の字謎の話を載せる。この話の典拠は不明であるが、『世説新語』「捷悟第十一」に、碑の裏面に「黄絹・幼婦・外孫・齋白」とある八文字が「絶妙好辞」を意味することを楊脩がすぐわかり、魏武帝は三十里行ったところで理解したという類話が載る。『法華玄義釋籤』巻十八ではこれを三十五里とし、『世俗諺文』には「有智無智隔三十里」として引かれる。さらに『世説新語』「捷悟第十一」では

その話の前に、魏武帝と楊脩による「闕」の字の字体と「合」の字の字体にまつわる字謎の話が載る。ただし、ともに孔子の話となっていない。

孔子の話としては、中山法華寺藏本『三教指帰注』に見られる。同話は『万葉集抄』(巻下)では「柵越しに麦食む小馬ののはつはつに相見し子らしあやにかなしも」(『万葉集』巻十四三三七)という歌の本文として引用される(『万葉集注釈』巻八にも)。ただし顔回が六丁で、閔子騫が十二町、冉伯牛が十八丁で、仲弓が二十四町で理解したとする。

原典にアプロウチするならば、孔子の字謎は、中国では南宋・趙彦衛の『雲麓漫鈔』巻三に次のようにある。

孔子作「大夫」及「千人」字如此。「夫」字從「大」從「一」、蓋「夫」中有「大」字、「千」字從「十」從「人」、「千」中有「人」字。

「大夫」という語は、「夫」の字と、その「夫」の字を分解した「大」の字と「一」の字の内「大」の字とよって成り、「千人」という語は、「千」の字と、その「千」の字を分解した「十」の字と「人」の字の内「人」の字とよって成っているとす。

「牛」の字と「午」の字の關係は、『古今事文類聚』別集卷二十七「人事部」「謁見」「門題午字」に、  
李安義者謁富人鄭生、辭以出安義於門上大書「午」

字而去。或問其故。答曰、牛不出頭耳。此亦昔人題鳳之意。「因徐辟見。以下係先容」

とある。さらに、南宋・姚寬の『西溪叢語』巻上に、

有隸字云、一生有十口、前牛無角、後走有口、十三字、下有一虎。其字恐「甲」「午」字謎也。

とあって、「午」の字を「牛」の字に角がない形とする。後代のものであるが、清代の『御定佩文齋書畫譜』第四、及び『六藝之一録』第一七一卷所引の「元応在篆法并訣」に、

生角「牛」字、非因午出頭。

とあって、角が出た「牛」の字は「午」の字が頭を出したのではないとする。

『俊頼髓脳』や中山法華寺藏本『三教指帰注』『万葉集抄』に見られる孔子の「午」という字に関する字謎は、このような宋代以降の筆記や小説と関連すると考えられる。

## ② 「紅葉題詩」

「人知れず思へばうける言の葉も」という歌に対して『俊頼髓脳』では、所謂、「紅葉題詩」の話を引き、「紅葉題詩」の大本は『本事詩』「情感第一」にある。顧況が三人の詩友と遊んでいたところ、大きな桐の葉に書かれた詩が流れてきた。顧況はそれに詩を流して、返事をし、

後十餘日、有人於苑中尋春、又於葉上得詩以示況。

として、十日あまり経って、苑で遊んでいた人が葉に書かれた詩を得て顧況に渡したという。ただこのままでは、男女が詩によって再会する話になっていない。

唐・范攄撰『雲溪友議』巻下「題紅怨」(『太平広記』巻一九八「文章」「崔融」にも)になって、男女の再会の話が示されるが、

親紅葉而吁怨久之曰、當時偶題隨流、不謂郎君收藏中篋、驗其書跡、無不訝焉。

として、その宮女は紅葉を見て、当時たまたま流れていた詩であるといい、盧渥はその宮女の筆跡を見て、彼女の詩であることが分かったとするが、これでも互いの劇的な理解という緊迫感が足りない。

『俊頼髓脳』と極めて近いのが、宋代・劉斧『青瑣高議』巻五「紅流記」の「紅葉題詩 娶姑韓氏」である。

唐・僖宗の御世の夕方、于祐は宮城の壁際を歩いていて、宮女が流した一詩を得た。于祐は科挙に落ち韓泳に同族の女・韓翠苹を紹介され、結婚後二人は仲睦まじく過ごした。その後は次のようになっていく。

既而韓氏於祐筥中見紅葉、大驚曰、此吾所作之句、君何故得之。祐以実告。韓氏復曰、吾於水中亦得紅葉、不知何人所作也。乃開篋取之、乃祐所題之詩。相對驚嘆感泣久之。曰、事豈偶然哉、莫非前定也。

韓氏曰、吾得葉之初、嘗有詩、今尚藏篋中。取以示祐。

韓翠萃は于祐の書棚から偶然自分の書いた紅い葉を見つけた。驚いて于祐に葉のことを問うと于祐はありのままを話した。韓翠萃は別の葉を取り出して「私が拾ったこの葉に詩を書いたのは誰ですか」と言うので、于祐が葉を見るとそれは正に自分が書いた詩であった。『俊頼髓腦』に「妹背のなからひ、先の世の契りの疎かならぬより」とある夫婦の仲が前世の契りによるというのも、『紅流記』に「泳曰、吾今知天下事無偶然者也」とする評と通じる。

ただそれは口承によって、言い伝えられた可能性もある。すなわち、すでに『後二条師通記』にも次のようにある。

唐代事言語云、或人遊宴、山川紅葉流、就中大葉執手見之有詩。其後數日不飲食、已以庾屈。人云、何故哉。対曰、紅葉手跡人罷向欲逢、為之如何。荒野事也。但帝王女御之中、女一人罷逢思給、早可相逢也。件言語之処、顯彼是事、約束所催也。宿宴実深。〔返事付書、詩者女許有之由示了。見之処已以自筆也〕〔後二条師通記〕寛治七年（一〇九三）一月二十三日）

ある人が宴で遊んでいたところ、川に紅葉が流れてき

て、手にとって見ると、そこには詩が賦されていた。それは、皇帝の女御が彼に逢いたために流した詩であったという。『事類賦』には見られない男女の結婚が記されている点において、『俊頼髓腦』と同じく宋代筆記の内容を含んでいる。特に、『後二条師通記』に「其後數日不飲食」とするのは、『青瑣高議』巻五「紅流記」に「祐曰、吾數月來、眠食俱廢」と、さらに『後二条師通記』に「人云、何故哉」とするのは、『青瑣高議』巻五「紅流記」に「友人大笑曰、子何愚如是也」とすることに極めて近い。『後二条師通記』で「宿宴実深」とするのは、『俊頼髓腦』の「妹背のなからひ、先の世の契りの疎かならぬより」とも関連する。『後二条師通記』『俊頼髓腦』ともに、唐代の『本事詩』から唐末の范攄撰『雲溪友議』を経て、宋代の劉斧『青瑣高議』巻五「紅流記」に至る過程で付加された情報と重なることになる。

#### イ、経路

##### i、類書

##### ①『白氏六帖』

そのように直接の原典を見えない場合も、『俊頼髓腦』にはあると考えられる。

漢字の字義に特化するが、同じく詠作の為の語彙集である『和名類聚抄』の序文には、「是故雖一百秩文館詞林、三百卷白氏事類、徒而備風月之興、難決背世俗之

疑」とあって、中国における類書の例として『白氏六帖』に挙げられている。『俊頼髓』には、その『白氏六帖』に見られる故事が散見する。

「芹摘みし」という歌について、

文書に「猷芹」と申す本文なりとぞ、疑へどもおぼつかなし。

とするのは『和歌童蒙抄』では、「与山巨源絶交書」(『文選』卷第四十三「書下」)の「野人有快炙背而美芹子者、欲猷之至尊」の李善注における『列子』を引いて「其室告之曰、昔人有美戎菽甘泉葶与芹子、对郷豪称之」とする。ただし、これには「猷芹」の語はない。「猷芹」の語と『列子』を結ぶのは『白氏六帖』「貢猷」で、「猷芹」列子曰、昔有猷芹於郷、老嘗之苦笑而退也。」とある。

「山鳥の」という歌に対する「をろのはつを」という語の説明も、『袖中抄』第十二・をろのはつをにかがみかけ)は「六帖云」として、『異苑』卷三に「罽賓国王買得一鸞、欲其鳴不可致、飾金繁、饗珍羞、对之愈戚、三年不鳴。夫人曰、嘗聞鸞見類則鳴、何不懸鏡照之。王従其言、鸞睹影悲鳴、冲霄一奮而絶」とあることを引く。実際に『白氏六帖』「鸞」に「置獲」として同文が引かれている。

「時しもあれ」「いかでかは」という歌の典拠として、  
后といなごといへる虫とは、物ねたみせぬものと、

文に申したれば、

とするのも、『毛詩』(国風・周南・螽斯)の詩序に「螽斯后妃子孫衆多也。言若螽斯、不妬忌、則子孫衆多也」とあることに拠るが、『白氏六帖』「妬」に「螽斯美后妃子無妬也」として同文が載る。

## ② 『藝文類聚』

「秋風に」という歌に対する「蘇武」の話にしても、漢武帝と申しける帝の御時に、胡塞といへる所に蘇武といへる人を遣したりけるが、え帰らで年来ありけるを、

とあって、蘇武が匈奴にされたことから、しか、さるにては益なしと思ひて、「まことにはあり」と言ひて、会はせけるといへり。

として、使者が蘇武と再会する話は、『漢書』「蘇武伝」ではなく、『蒙求』(二六九「蘇武持節」)にまとまっている。ただ、「まことにはあり」とする会話は『蒙求』には無く、『漢書』「蘇武伝」に「武等实在」とある所と対応する。この両方を含むのが『藝文類聚』「書」で、「漢書曰、蘇武使匈奴、被留、昭帝即位、求武等、匈奴言武已死、後漢使至匈奴、教者謂单于、言天子射上林中、雁足有係帛書、言武等在某沢中、单于顧左右而驚。謝漢使曰、武等实在、於是遣還。事具鳥部雁篇」とある。

## ③ 『事類賦』

「かぞいろは」という歌に対して「燕、男二人せず」といへる事、文集の文なりとぞ」とするのは、『南史』巻七十四・列伝第六十四に、「霸城王整之姉嫁為衛敬瑜妻、年十六而敬瑜亡、父母舅姑咸欲嫁之、誓而不許、截耳置盤中為誓乃止、常双飛来去、後忽孤飛。女感其偏栖、乃以縷繫脚為誌。後歲此燕果復更来、猶带前縷。女復為詩曰、昔年無偶去、今春猶独帰、故人恩既重、不忍復双飛」とある故事に拠る。それは共に宋代の『太平広記』（巻二七〇）『太平御覧』（巻九二二）『事類賦』（巻一九）『通志』（巻一六七）に見えるので、これも類書から理解することができるが、『和歌童蒙抄』（巻八・鳥部・燕）では「南史曰」とした上で、特に「出事類賦」とするから、その内の『事類賦』「禽部」「燕」の「衛婦亦聞於繫縷」に引く『南史』が出典であるとも考えられる。

ii、先行歌論書・詩歌

『後二条師通記』における「紅葉題詩」の話が共通するように、すでに、日本で言い慣わされていたと考えられる故事も『俊頼髓脳』には確認される。例えば、「あせぬとも」「脱ぐ沓の」という歌で説明される「井守の印」は、『漢書』「東方朔伝」師古注『博物志』巻四「戯術」に拠るが、『疑問和歌抄』（巻十・虫・守宮）に「委見四条大納言和歌議論」とあって、公任の「歌論議」に見えるとする。『袖中抄』（第六・ゐもりのしるし）でも、

「歌論義 和語抄等をほやうをなじやうなれば略也」とあって、さらに逸書「和語抄」を指摘する。『能因歌枕』（広本）の末尾に「ゐもりの印とは、もろこしに人のありくに、虫のちを女のかひなにつけてゆくべし。それにことをとこしつれば、そのむしのちうする也」とあり、この故事を踏まえた歌が『赤染衛門集』（八八・八九）にあることで、すでに平安中期に知られていたことがわかる。元永元年十月二日『内大臣家歌合』の「わが宿の籬にやどる菊なくはなにつけてか人もとはまし」（「時雨」題・六番・三六・信忠）に対する基俊の判詞にも「井守の印などのやうに聞こえ侍るかな」とあるのは、「井守の印」という語が俚諺化した証である。

詩句に言及されていた故事もあり、例えば、「をろのはつを」については、「類山鶏之対円鏡、無而何為（『本朝文粹』巻五・大江朝綱「為清慎公辞右大臣第三表」）とあり、「血の涙」という和歌に対する「卞和の珠」の故事についても、「未過卞和献、無由奉皇天」（『経国集』巻十四・紀虎継「五言、奉試得治荆璞」）「傾色呉人釵、照隣和氏珠」（『続本朝文粹』巻一・大江匡房「西府作」）「伯牙響琴徒秘曲、卞和泣玉独霑巾」（『続本朝文粹』巻十一・大江匡房「大唐大慈恩寺大師画賛」）などがある。

iii、経信

その「卞和の珠」の話は、そもそも『韓非子』巻四

「和氏第十三」『漢書』「鄒陽伝」『蒙求』「卞和泣玉」他に見える話であるが、『俊頼髓腦』では逸話に加えて、「帝王の愚かにおはしまする例に、申すなることなり。帝の御前などにては、荒涼しては詠むまじきことと承りしかど」として「承る」とするから、それは経信から聞かされていたことであった。実際、『難後拾遺抄』「第十五雜一」では「墨染めに」(『後拾遺集』「雜一」・八九二・大中臣輔親)という歌に対し、「この血の涙の本文は」として卞和の説話を記す。

「露の命」「草の根に」という歌に対する「月の鼠」の話も「経文にあることとぞ承る」として「承る」とし、「詩に短歌行、長歌行といへることあり。されどそれにその心かなはず」とする長歌短歌論も「とぞ承る」で結ばれているから、それらも経信から聞き伝えられたこととなる。吟詠の長短で「長歌」「短歌」を区別するのは、曹丕の「燕歌行」に「短歌微吟不能長」(『文選』卷二十七「長歌行」李善注)などあることを念頭に置いたか。<sup>21)</sup>

ウ、翻訳の齟齬

i、伝授の誤認

ただ「卞和の珠」の話は、『俊頼髓腦』では左右の手を切られたとすのに対して、『韓非子』と同じく『難後拾遺抄』他では足を切られたことになっており、<sup>22)</sup>「月の鼠」の話も完全に一致する話は、見当たらないことを

考えると、その差異は俊頼に問題があると推測される。

「野守の鏡」の逸話に付される「徐君」とは、『史記』「呉太伯世家」に「還至徐、徐君已死、於是乃解其宝剑、繫之徐君冢樹而去」とあって剣が墓に掲げられた話であり、この故事を踏まえた俊頼の歌に「なき影に掛ける太刀もあるものをさやつかのまに忘れはてける」(『散木奇歌集』雜上・一三四三)があるから、この故事は理解していたはずである。ともに墓という状況が関連する。

原典を翻訳したと考えられる「長恨歌」においても、楊貴妃の父を「楊玄琰」とすべき所を、「楊元琰といへる人の娘ありけり」として「楊元琰」としている。「楊元琰」は、同時代人に『旧唐書』卷一百八十五下・列伝第一百三十五下に「楊元琰、虢州閿鄉人、隋礼部尚書希曾孫也」とあって、『新唐書』卷一百二十・列伝第四十五に「楊元琰者、字温、虢州閿鄉人、漢太尉震十八代孫」とある。

「秋風に」という歌に引かれる蘇武の話に「え帰らで年来ありけるを、衛律といひける人の、また行きて、「蘇武はありや」とする「衛律」は、『漢書』(漢書卷五十四・伝第二十四)によると、「及衛律所将降者、陰相与謀劫单于母闕氏歸漢。会武等至匈奴」とあって、蘇武が来る前に匈奴への使者となり投降していた。蘇武の生存を尋ねたのは、別の「使者」である。

「紅葉題詩」の詩を受け取った男性を「呉松孝」とし、『俊頼髓脳』を見たと思われる『今昔物語集』巻十「震旦呉招孝、見流詩恋其主語第八」では「呉招孝」とされているが、ともに伝未詳である。

以上は、名前や状況の類似による俊頼の誤認であると考えられる。

## ii、『源氏物語』の投影

『俊頼髓脳』における誤認の要因には、このような錯綜があった。

「長恨歌伝」の翻訳において、『俊頼髓脳』で「女御をば武淑妃となむ聞えける」とする「女御」は日本における女官の官職名である。その妃と女御が亡くなった後に、それおぼしめし嘆なげきてこれらに似にたる人やあると、求め給ふほどに、楊元琰といへる人の娘ありけり。

として、彼女たちに似ている女性を探して楊貴妃が見つかったとするは、『源氏物語』における桐壺更衣と藤壺を投影したか。その容姿を、

容貌、世にすぐれてめでたくなむおはしける

とするのも、「右大臣は才、世に優れ、めでたくなむおはしまし」『大鏡』左大臣時平とあり、女性の容姿について同種の表現は「かたちども、すぐれてめでたし」『宇津保物語』楼の上・上「第一の御女、村上の先帝の御時

の女御、多くの女御、御息所のなかに、すぐれてめでたくなむおはしましき」『大鏡』右大臣師輔)などあり、さらに容姿を、

初めおはしける女御后にもまさりて、めでたくなむおはしける。

とするのも、『源氏物語』桐壺に「女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」「はじめより我はと思ひ上がり給へる御方方」とある。

玄宗が詠じた有名な台詞、

もし天に在らば、翼を並べる鳥と作らん。地にあらば、願はくは枝を交はしたる木と為らん

はもちろん「長恨歌」の「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」『白氏文集』巻十二に拠るが、「翼を並べる」「枝を交はしたる」とする表現は、『源氏物語』桐壺の「羽をならべ、枝をかはさんと契らせ給ひしに」に拠る。楊貴妃の墓を、

その楊貴妃が殺されける所へ、帝おはしまして御覽じければ、野辺に浅茅、風に波寄りて、あはれなりけむ。

とするのは、『後拾遺集』秋上・二七〇に「長恨歌の絵に、玄宗もとの所に帰りて、虫ども鳴き、草も枯れわたりて、帝歎き給へるかたある所をよめる」などとあるこ

とも扱るであろうが、『源氏物語』『桐壺』における桐壺更衣邸の状況に「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。」とあり、桐壺帝の歌に「雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿」とあることを踏まえたと考えてよい。

「をろのはつを」の逸話において、「これを鳴なかせ給へる女御、后に立ちて、かたはらの女御嫉みそねみ給へることかぎりなしと言へり」とするのにも、『源氏物語』『桐壺』のイメージがあったはずである。

王昭君の逸話において、その墓を、

帝、恋しさに思し召しわづらひて、かの王昭君が居たりける所を御覧じければ、春は柳、風になびき、鶯つれづれに鳴き、秋は木の葉、庭に積もりて、軒のしのぶ隙なくて、いとゞ物あはれなること限りなし。

とするのは、『世説新語』『西京雜記』にはなく、楊貴妃が亡くなった後の描写を「長恨歌伝」(『白氏文集』卷十二)で「每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落」「宮葉滿階紅不掃」とすることを踏まえたと考えられるから、それも間接的に『源氏物語』を経由しての投影であると考えられる。『俊頼髓脳』における漢故事表現には平安

散文の場面が投影されていたのである。

### むすび

『俊頼髓脳』の本文においても、漢文の形式を残している。「発句」や「傍字」は序だけでなく、本文の中にも見られ、「凡そ、歌は、神仏、帝后より始め奉りて、あやしの山賤にいたるまで、その心あるものは皆詠まざるものなし」「おほかた、歌を詠まむには題をよく心得べきなり」などである。『俊頼髓脳』も『歌経標式』等の漢文体の歌論書と同様に、漢文の形式に則っていた。

「式」の整理はまた、それらの「式」が依拠した唐代詩論にその淵源がある。

歌語「積」においても、例えば、『本事詩』などの詩話と同じ話を収録する。詩話は宋代に至っておびただしい数の作品が作られる。時を同じくして詩話はまた朝鮮にも確認されるようになる。『江談抄』を加えて、日本においても「積」は院政期以後、多くの作品に見られるから、それはまた中日韓における趨勢でもあった。

『俊頼髓脳』における漢文学は、中世東アジア詩学の中にあるはずである。

### 注

(1) 小沢正夫氏『古代歌学の形成』(塙書房・一九六三



年)に詳しい。

(2) 『俊頼髓腦』の書名は、『袋草紙』巻上では「俊頼髓腦」とあるのは、別に「俊頼朝臣抄物」とある事を考えれば、それは「俊頼の髓腦」ということであると考えられる。『袖中抄』に「無名抄」とされていることを考えると、元来、書名は無かったと考えられる。

(3) 「式」「釈」という語は『奥義抄』の用語によった。

(4) 『和歌作式』も冒頭が「風聞、和歌自神御世伝而未定章句」となり、『石見女式』では「夫原、和歌感鬼神之幽情、慰天人之恋心、去者自神御世伝而未定章句」とあって、『和歌作式』も同様に「夫原、和歌」とあって序文であることがはっきりと分かる。

(5) これらの序の構造については、別に詳述する。

(6) 大曾根章介氏『大曾根章介著作集』(第一巻)汲古書院・二〇〇〇年)「文体論」の各論文を参考にした。

(7) 『俊頼髓腦』の本文は、二〇二二年出版予定の家永香織・小野泰央・鹿野しのぶ・館野文昭・福田亮雄『俊頼髓腦全注釈』の注釈作業によった。

(8) 木戸裕子氏「平安詩序の形式―自謙句の確立を中心として―」(『語文研究』六十九・一九九〇年六月)。

(9) 例えば『土佐日記』ならば「男もすなる」から「書きつく」まで、『蜻蛉日記』ならば、「かくありしときすぎて」から「さてもありぬべきことなむ多かりける」まで。

(10) 小野『江談抄』の詩文論と平安朝詩文(『中世漢文

学の形象』勉誠出版・二〇一一年)で論じた。

(11) 別に「燕二人男せず」「燕も、戊己の日は、すべてまうで来ぬ」「験芹」が散らばっている。

(12) 「釈」は連歌をはさんで古歌と末世の歌とに分けられている。

(13) さらに国立国会図書館蔵『和漢朗詠注』には「胡王申ク、我國ハ戎ノ住カニテ、ヤサシキ無女。可然三千人ノ后キ、一人給ハツテ下ラント云ヘハ」とある。

(14) ただ『俊頼髓腦』の本文間に異同があり、静嘉堂文库蔵『無名抄』俊頼「久途宮家旧蔵『無名抄』(日比野浩信氏〈未刊国文資料『久途宮家旧蔵本俊頼無名抄の研究』和泉書院・一九九五年)には「文書の文なりとぞ」とある。

(15) 原典は、『抱朴子』(内篇・至理)に「适偶有所偏解、鶴知夜半、燕知戊己、而未必達於他事也」、「事類賦」(巻十九・禽部二・燕・「性知戊己」)所引『博物志』に「燕戊己日不銜泥涂巢、此非才智、自然得之」、『太平広記』(巻四六一・禽鳥二・千歳燕)に「齊魯之間、謂燕為乙、作巢避戊己」とある。春分または秋分に最も近い戊己の日が社日となる。これを踏まえた句に、「百鳥乳雛畢、秋燕独蹉跎。去社日已近、銜泥意如何。不悟時節晚、徒施工用多。人間事亦爾、不独燕营窠」(『白氏文集』巻七「晚燕」)がある。

(16) 逆に、『白氏文集』の冒頭「新楽府」も平安鎌倉作品に頻繁に引用される。

(17) 仁平道明氏「江談抄」の虚言——中国文芸による説話の形成——『和漢比較文学論考』武蔵野書院・二〇〇〇年)では、『江談抄』第六の文時が句の理解において「我減於朝綱卅年」としたことの類似を指摘している。

(18) これについては、岡本不二明氏「紅葉題詩故事の成立とその背景について」『唐宋伝奇戯劇考』汲古書院・二〇一〇年)に詳しい。

(19) 例えば『転法輪抄』「夫婦 上」に「以宿縁成夫婦」「摩鄧女事」「夫婦世世縁」などがある。

(20) 「天の河うき木にのれる」歌における張騫が天の河に至ったという話が胡曾『詠史詩』の晩唐・陳蓋注に見られるというのも(黒田彰子氏「張騫考——俊頼髓脳へのアプローチ」『中世和歌論攷 和歌と説話と』和泉書院・一九九七年)に指摘される)、宋代筆記小説に類すると考えてよいか。

(21) 「野守の鏡」における「徐君が鏡」の逸話について『俊頼髓脳』で「また人申しける」とするその「人」を、顕昭本では「匡房の帥」とするのも、それが事実とするならば、経信における漢学は匡房経由である可能性がある。『江談抄』と『俊頼髓脳』は直接的関係を持つ。時助という右の舞人が経信に語ったとする「郭公を鶯の子といへること」は『江談抄』第三「郭公為鶯子事」でも「戸部卿談曰」として経信の言として引かれている。さらに例えば、朝綱の「かぞいろは」という歌に対して

『俊頼髓脳』で「朝綱、公家のかしこまりにて三年ありければ」とすのは、『朗詠江注』に「此時去弁三年云々」(雑・詠史・六九七)とあることによる。これは後に定家によって、「日本紀竟宴歌也非身上事」(定家本『俊頼髓脳』)と否定される。

(22) 『三教指帰注』は「韓子曰」とあるように「韓非子」を典拠としており、『韓非子』にある通り両足を切られたと記す伝本(『真言宗全書』所収承久本)もある。ただし小峰氏が指摘するように中山法華経寺本『三教指帰注』(巻上)には片手片足を切られたとあり(『俊頼髓脳』の故事と和歌)『院政期文学論』笠間書院・二〇〇六年)、手を切られたとする文献を俊頼が目にしてきた可能性も考えられる。

(23) 『宇津保物語』では離別の場面を「胡茄の音を聞き悲しびて」とするのは、『琴操』(王昭君の「怨曠思惟歌」)に「秋木萋萋、其葉萎黄」とあり、『樂府詩集』(巻第二十九・相和歌辞四・吟歎曲・王昭君)に「胡地無花草、春来不似春」「唯有清笳曲、時間芳樹春」などとあるのを反映していると考えられる。

(24) 小野「十二世紀に至る詩歌論の展開——格式から詩話へ——」(『中世漢文学の形象』二〇一一年・勉誠出版)『俊頼髓脳』と同時代歌論書(『中央大學國文』六四号・二〇二一年三月)でも論じた。

(おの やすお 本学教員)